

子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Development of a parent-reported screening tool for avoidant/restrictive food intake disorder (ARFID): Initial validation and prevalence in 4-7-year-old Japanese children

和文タイトル:

回避・制限性食物摂取障害(ARFID)に関する保護者向け質問票の開発:4歳から7歳の日本人小児における初期検証と有病率

ユニットセンター(UC)等名: 高知ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Appetite

年: 2021

DOI: 10.1016/j.appet.2021.105735

筆頭著者名: Lisa Dinkler

所属 UC 名: 高知ユニットセンター

目的:

小児における回避・制限性食物摂取障害(ARFID)については、スクリーニングのための質問票は未だ無く、その有病率も不明である。本研究では、新たに開発した保護者向け質問票を用い、日本人小児の ARFID 陽性率、陽性になった小児のうち身体的・心理社会的問題を抱える割合を把握し、質問票自体の有効性も検証する。

方法:

2011~2014年に高知県で生まれたエコチル調査参加者児童の保護者を対象に質問票調査を実施し、3728名について分析を行った。調査当時の参加児の年齢は4~7歳、回答率56.5%であった。質問票作成にあたっては、小児の食行動に関する既存の質問票2種(BPFAS・CEBQ)およびDSM-5(精神疾患の診断・統計マニュアル)のARFID診断基準を参考とした。

結果:

調査時点で49名(1.3%)がARFIDスクリーニング陽性であった。陽性であった児童の食行動に伴う問題として、心理社会的問題のみ(49%)、身体的問題のみ(36%)、その両方(14%)という回答であった。また、食材に対する感覚過敏(63%)・食べることへの興味の欠如(51%)が、食物回避の最も一般的な要因であった。ARFIDスクリーニング陽性となった参加児は、低体重・低身長で、食事の時間や栄養摂取に関する問題行動や偏食が多く、満腹感の反応も強かったことから、新しいスクリーニングツールの有効性を予備的に裏付ける結果となった。

考察(研究の限界を含める):

本研究は、7歳までの小児を対象としたARFIDのスクリーニング研究としては、これまでで最大規模のものである。ARFID陽性グループでは、心理社会的な問題を持つ小児が6割以上を占めることから心理社会的な問題が生じているということだけでもARFIDの診断基準を満たす可能性が示唆される。研究の限界としては、医師によるARFIDの確定診断の情報がないこと、情報は全て保護者から得ているということで、体重の情報などが正確でない場合などが考えられる。今後の研究では、臨床的に確認された症例を用いて、ARFIDのスクリーニングのためのこの新しい質問票の診断的妥当性を検討する必要がある。

結論:

高知県のエコチル調査参加者において、ARFIDスクリーニングの陽性率は1.3%であった。その主要因は、食材に関する感覚過敏と食べることへの興味の欠如であった。今後、一般集団における有病率についてもさらなる研究が必要である。